阿波野青畝氏 概略

明治32年2月、俳人阿波野青畝は奈良 県高市郡高取町大字上子島に生まれまし た。

少年期から耳が遠く、中学から上の学校への進学を断念せざるを得ない絶望から、「万葉集」をはじめ、読書にふける毎日を過ごしました。これがのちの俳句創作に拍車をかけることになりました。

18歳の時に、「虫の灯に読み昂(たかぶ) りぬ 耳しひ児」と詠んだといわれてい ます。

畝傍中学時代に、郡山中学の英語教師・ 原田浜人に句作の指導を受けていて、郡 山に来遊中の高浜虚子と出会い、師弟の 間柄になりました。

のちに高浜虚子から、「耳の遠い児であるといふことが、勢い、君を駆って叙情詩人たらしめた」と言われるほどに耳疾そのものが、青畝の俳句にしみじみとした哀歓をただよわせるに至っています。

昭和3年、青畝の叙情性が最もよく表現された一句が

葛城の 山懐(やまふところ)に 寝釈 迦(ねしゃか)かな です。葛城山は古くから多くの神話を持ち、また修験の聖地でもありました。葛城山が持つ神秘的な光景から写生でありながら、その句は無限の広がりを持っています。まさに俳句の聖人でありました。山口青邨の講演中の言葉から、水原秋桜子(しゅおうし)山口誓子(せいし)高野素十(すじゅう)と並んで四Sと称されるようになりました。

この句が誌名となり、昭和4年1月、郷 里の俳人たちの要請で「かつらぎ」を創 刊し、青畝は主宰となりました。

高取町には、また、45のもう一人である高野素十(すじゅう)も一時期住んでいました。素十は、一高から東京帝大を経て医学を修め、昭和9年から35年まで奈良県立医科大学の法医学教授を務めました。この間の一時期、昭和28年夏~昭和29年4月まで高取町大字観覚寺に住んでいて、ここから奈良医大に通っていました。

素十の俳句は、視覚を中心とした厳格な リアリズムを漂わせる「厳密な意味にお ける写生」と虚子が評価した作風です。 片や青畝の句は、しみじみとした情のぬ くもりを感じさせます。

俳句の句意

「葛城の 山懐に 寝釈迦かな」 (かつらぎの やまふところに ねしゃ かかな)

郷里の高取からは葛城山がよく見える。 寝釈迦の図は、実際には葛城山の山腹に ある寺の中にあるが、まるで葛城山腹に 寝釈迦が抱かれているがごとく思える。

「虫の灯に 読み昂ぶりぬ 耳しひ 児」

(むしのひに よみたかぶりぬ みみし ひご)

幼い頃よりの耳疾でよく耳が聞こえない。 秋虫の音を聞きながら本を読みふけって いる「耳しひ児」それは私なのだ。

「供藷 眼耳鼻舌身 意も無しと」 (そなえいも げんじびぜっしん いもなしと)

戦時中のこと、長円寺の仏様に供えてあるさつま芋を住職に頂いて、お腹が減っていて、全身で味わって、全身でおいしかったと喜んだ。

「満山の つぼみのまゝの 躑躅かな」

(まんざんの つぼみのままの つつじ かな)

これから躑躅の花が、一杯に咲こうとし ています。

「飯にせむ 梅も亭午と なりにけ り」

(めしにせむ うめもていごと なりに けり)

上京のついでに梅見の誘いをうけた。東京を離れて多摩川の長い堤を、どういうように歩いたかは覚えていない。不便な土地へひっぱられ、見るとあちこちに農家があり畑に梅が咲いている。畑に籾殻などが敷いてありその上を踏んで行くと、見晴らしのきく場所に粗末な置床几をちらしてある。数人の客が甘酒を飲んで遊んでいる。句を作るべく、私らは梅の下枝をかいくぐったりする。足が重くなったりする。とが重くなったりする。とが重くなったりする。とが重くなったのである。 りに問いたくなったのである。